

きょうはなにいろ？

# けるくるーる

第1号

発行:こぎん刺し 絵糸

2013/5/19

<http://kogin-eito.com/>



## 季節のぜいたく

① みずべ

小さな発見にうれしくなる。記念すべき

第一回は、こぎんのうまれた街・弘前編です。

弘前市役所前。ゴールデンウィークも後半に差し掛かった弘前城址公園の前を、晴れたり曇ったり空の下、たくさんの見物客が行き交う。お目当ては、東北屈指と言われる数千本の桜。年に一度の桜まつりを楽しみに集まってきた、全国津々浦々からの観光客だ。広大な公園のまわりには、道路に面してぐるりとお濠が巡っている。

このお濠沿いにも数えきれないほどの桜の木が並び、水の上に枝をせり出すようにおろして、ぼつ

りぼつりの雨の中いじらしい美しさを  
見せてくれていた。

記念撮影に夢中の家族や、ポケッ  
トだらけのベストを着た写真愛好家。  
りんごシャベット屋さんで、おばさ  
んからアイスを受け取る、嬉しそう  
な顔の子ども。うすいピンクの花を背  
景に、みんな、いつもより少し浮かれ  
た様子に見える。

そんな光景もだんだんと見慣れて  
きた頃、お濠の水面にふと目をやる  
と、遠くでなにやら小さな真白い点  
がさざ波を立てているのが目に止まっ  
た。深くて透明な翡翠の水に映える、  
光沢のある真白な点である。

\*\*\*

よく目をこらすと、それはカモだっ  
た。一匹の鴨が、流れに逆らい泳いで  
いる。緑の丸い頭に、顔の横にはきれ  
いな白をひとはけ光らせ、ゴマ茶色の  
コロンとした体を水に浮かせて。綺麗

にたたまれた羽根になめらかな光沢  
をのせ、音もたてず水面をすべってい  
た。

お堀の外はたくさんの方が行き交  
うのに、目の前の桜とまつりの噂で、  
気づく人はあまりいない。それを知っ  
てか知らずか、カモのほうもちゃっか  
りポーカーフェイスを決め込んで、石  
垣を背景に、やけに堂々とお濠の真  
ん中を泳いでいるのだ。

調べたところ、この西濠には、カモ  
だけでなく白鳥も住んでいるようだ。  
初夏には親子で泳ぐ姿も見られるこ  
とがあるとか。想像しただけでも、  
あまりのかわいらしさにウズウズして  
しまうではないか。



水辺に鳥たちが集まる様子は、目  
にも涼しく、思いがけず爽やかな気  
分にさせてくれる光景だ。これから  
の季節の小さな贅沢。東京でも、身  
近にそんな川辺を探したくなった。

(絵)



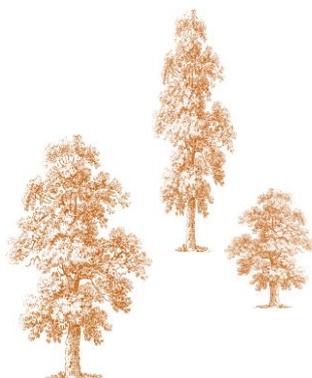
## 5月の一句

限られた文字数でゆたかな余韻を楽しむ。  
季節を愛で、自分の言葉で切り取りたいと思う  
気持ちは、昔も今も同じですよ。

遊具下小さき猫を撫ぜる薫風

(実)

春の夜、公園脇を通りかかる。  
昼間の喧騒は消えさり、子供ら  
に代わってひっそりと遊具を使う  
のは、猫たちなのかもしれない。  
困む木立の間を縫って吹き抜け  
る風は、梅雨の気配をまとって  
ながらも、爽やかである。



〈寄稿〉  
猫の眼



その日は四月にしては暑い日で、窓を開けていた。だから、最初にそれが聞こえてきたときは、びっくり外で遊んでいる子どもたちの声かと思っただけで、どうも違う、もっと近くから聞こえるような気がする。私は針と麻布を持ったまま、窓を閉めに行った。静かになった部屋にふたたび座ってみると、その「モシモシ、モシモシ」というか細い声の主は、どうやら私が今ちようど刺している茶色い（猫の眼）のもので、おまけにそのタテ長の眼で、こちらをじっと見ているらしい。

とはいっても、今の私には、謎のモシモシに回答している暇は、残念ながらない。気づいてないふりをして、しばらく作業を続けたけれど、あまりに何度も呼ぶので、とうとう観念して

「はい、なんですかあ」

と、我ながらぞんざいに答えた。すると声はピタッと止んで、茶色の眼

も、気のせいかな明るくなって、新品の十円玉みたいに光っている。そして、さっきよりいくらかはつきりした口調で、しゃべり始めた。

「あのー、お忙しいところすみません。ちよっとねえ、お願いがあるんですけども」

丁寧というか、やたら持って回った言い方をする。針を動かしながら黙って聞いていると、

「お腹がすきました。食べるものをください」

と、いきなり図々しいことを言い出したので、さすがに驚いてしまった。

「食べるもの？ ないよ」

「だいたい、なに食べるの」

「それはまあ、猫ですからね、お魚とか」

「あー残念。今日は買い物に行っなくて、魚も、肉も、なにかも切らしてるの」

「いえ、そんな、あなたの食糧を分けてくれる言うんじゃないやしません。その糸で、私の横つちに、私の食べるものを、ちよっと刺してくださいさるだけいいんです。お願いします」

私はうーんと考えて、横に広げているごぎんの図案集をばらばらやっただのち、眼の真横に、黒い糸で（豆）を刺してやった。

「はいどうぞ、丹波の黒豆」

「あのですね、私は肉食なんです。豆タンバだか何だか知りませんが、豆なんか食べません」

そう言って、眼はパイとあっちを向いてしまった。なんだか面倒なことになってきた。私は（豆）をほどこいて、もう一度図案集をめくって見たけれど、

食べそうなものなんて見当たらない。仕方なく、同じところに今度は（ウロコ）を刺した。

「ほれ、サカナだよ。食べな」

「ひどいひどい。ウロコだけなんて、あんまりだあ」

眼はみるみる光をなくして、昭和四十年くらい、古びた十円玉の色になってしまった。そしてそのまま、静かになった。

私は（ウロコ）をほどこいて、もとの作業に戻ろうと思ったけれど、なんだかこっちまで無性にお腹がすいて、手につかなくなりました。やれやれ。

そのあと、私は針と布を一旦片付けて、自転車で近所の和菓子屋へ行

き、豆大福を買ってきて食べた。食べながら、さっきの猫のことを考えた。猫って、豆を食べないんだ。おいしいのに。その点私は、ウロコは無理にしても、たいいていのはおいしく食べる。おまけに、こっちやって静かな部屋で糸をちくちく刺したり、大福を買ってきたりして一日を過ごしているのだから、猫よりずっと気ままに生きているのかもしれない。そんなことを思ったのである。

作・藤田一樹（ふじたかずき）

詩人、ライター。フリーペーパー『ジップ』主宰。



※ごぎん刺しは、へもとことよばれる図案の連続でできています。ひとつひとつのものは口伝えられた名があり、（猫の）マナグ（眼）、（豆）など、多くは自然や動物をモチーフとしています。

《編集後記》

第一号です。長く続きますように、ご声援お願いいたします。 絵